

「課題別ステークホルダー会議」報告書

～家庭のプラスチックごみを半分に減らすには？～

議論のとりまとめ

なごや環境大学 循環型社会推進チーム

2010年3月

～ 目 次 ～

- 1. はじめに 1
- 2. 会議開催の経緯 2 ～ 3
- 3. 対立点まとめ 4 ～ 5
- 4. 議論のまとめ 6 ～ 7
- 【参考】会議の要点 8 ～ 14
- 5. おわりに 15

はじめに

本冊子は、平成 20 年度に「家庭のプラスチックごみを半分に減らすには？」をテーマに、なごや環境大学・循環型社会推進チームが主催した課題別ステークホルダー会議の成果をまとめたものです。会議前半の「ペットボトルを半減させるには？」と後半の「プラスチック製容器包装を半減させるには？」という 2 つのサブテーマについて、討議の結果明らかにすることができた市民と事業者の意見の対立点や一致点を整理しています。

去年は「会議で行ってきたことを皆で振り返ることができるような資料」として、「実施の記録」を発行しました。さらに 1 年の時間をかけ、「課題別ステークホルダー会議のとりまとめ」は 2 つの形で結実しました。その 1 つが本冊子です。会議目的には、「容器包装リサイクル法改正に向けたしみん意見のとりまとめ」も挙げられていました。市民参加の準備会で家庭ごみの多くを占めるプラスチック製容器包装が注目され、その半減を会議テーマとし、会議では法律上の制約や矛盾点も明らかになりました。しみん意見のとりまとめをパブリックコメントに出すことは会議成果を生かす場として自然といえます。平成 21 年 11 月には元日本容器包装リサイクル協会の竹川治朗氏と意見交換する機会を得て、本報告書の 6・7 ページに示した現状・結論・今後の取り組みを A3 用紙 1 枚にまとめる形の原型ができ、今年 2 月の「とりまとめ会」（課題別ステークホルダー会議の市民 5 名参加）を経て現在の形としました。本冊子は「会議のことを多くの人に知ってもらうためのコンパクトなまとめ」とする点でチームの合意を形成し、その他の点もできるだけ一致点を探りながら作成しました。会議各回の討議のまとめは 8～14 ページにありますが、討議内容を詳細に知りたい方は、「実施の記録」をご覧ください。会議結果の分析は現在も進行中です。

もう 1 つの形のとりまとめは、多面的に議論を整理し、さまざまな場で議論を続けていけるツールとしての環境ゲーム「クロスロード：循環型社会編」です。阪神淡路大震災をきっかけに作られた防災ゲーム「クロスロード」をフレームにして、課題別ステークホルダー会議での主な論点について、賛否とその理由を話し合える仕組みになっています。「クロスロード：循環型社会編」は、循環型社会推進チーム代表の杉浦淳吉さん（愛知教育大学准教授）が環境省の科学研究費による 2R 研究会と循環型社会推進チームの共同プロジェクトとして作成し、平成 22 年 3 月にゲームキットとして完成しています。課題別ステークホルダー会議での議論内容はゲームの解説資料にも記述がありますが、ゲームを通して「課題別ステークホルダー会議」を知ってくださった方が、会議の全体像を知りたいという場合も、まず本冊子を手にとってもらえれば、と思います。

循環型社会推進チームは、なごや循環型社会・しみん提案会議で「しみん提案」が作られ、なごや環境大学の中で本チームが活動を始めた経緯に向き合い、「しみん提案」と「なごや環境大学」の 2 つの視点でこれまでの活動を振り返り、今後を考え始めた段階です。取り組むべきことに対してまだこれからの部分も多いです。ただ、課題別ステークホルダー会議の意義は「意見が言える場所がほしい」という市民からも、「アンケート調査などではわからない市民の意見を直接聞くことができるよい場所。市民・事業者・行政が集まり、突っ込んだ議論をするこの会議は循環型社会推進チーム活動の目玉」という事業者からも評価されている確信を持った一年でした。チームメンバーの皆様、関係者の皆様、会議に参加してくださった方々に改めて御礼申し上げます。

2010 年 3 月

循環型社会推進チーム サブリーダー

前田洋枝

課題別ステークホルダー会議開催の経緯

会議設置の背景

(1) 名古屋市第4次一般廃棄物処理基本計画

率直でオープンなごみ行政の推進

- ① 「分かりやすく、かつ、十分な情報提供」
- ② 「率直な問題提起」により、
- ③ 本音の議論を通じた合意形成を図りながら、ごみ行政を進めます。



課題別ステークホルダー会議による協議の場づくり

(2) なごや循環型社会・しみん提案会議

15～20年先の名古屋がめざすべき循環型社会の姿とそこに至る道筋を取りまとめた「しみん提案」の実現に向けた協働の取組み推進

会議の目的

「しみん提案」において重視された「発生抑制」が社会の隅々に浸透している「循環型社会なごや」を実現するため、市民・事業者・行政の協働による取り組みを導き出す。

- ① 各課題別に討議の場を設定し、ステークホルダー間で本音の議論を展開
- ② 意見分布を詳細に分析
- ③ ステークホルダー間の対立点を明確化
- ④ 容器包装リサイクル法見直しを見据え、「しみん意見」をとりまとめ

テーマの設定

「家庭のプラスチックごみを半分に減らすには？」

テーマ選定の視点

- ① 市民の関心
- ② 「第4次一般廃棄物処理基本計画」や「しみん提案」の課題

論点整理の経過

- ◆ 準備会（合計2回）での市民意見
「家庭のプラスチックごみを半分に減らす」ためのターゲット
「製品プラ」 < 「容器包装プラ」
- ◆ 容器包装の中でも市民参加者の関心が高かったものとして、
まずは①ペットボトル、次に②食品容器包装について議論

会議の開催

第1回 (H20. 8. 2) : 「ペットボトルのリサイクルと発生抑制」

<論 点> ①ペットボトルを減らすには? ②ペットボトルの軽量化
③ペットボトルから他の材質への転換 など

<参加者> 飲料メーカー、リサイクル業者、回収&処理業者、市民(7名)

第2回 (H20. 8. 23) : 「ペットボトルのリユース」

<論 点> ①ペットボトルのリユースについて ②ボトル to ボトルのリサイクル

<参加者> 飲料メーカー、リサイクル業者、販売事業者、市民(8名)

第3回 (H20. 9. 20) : 「ペットボトル以外のペット樹脂のリサイクル」

<論 点> ①ペット樹脂容器の回収とリサイクル ②リサイクルコスト
③店頭等の回収拠点と費用負担 等

<参加者> リサイクル業者、販売事業者、市民(5名)

第4回 (H20. 10. 4) : 「前半会議のふりかえり」

第5回 (H20. 11. 1) : 「容器包装・バイオマスプラスチック」

<論 点> ①バイオマスプラスチックについて ②環境貢献について

<参加者> 容器製造業者、販売事業者、市民(8名)

第6回 (H20. 12. 6) : 「プラスチック製容器包装の発生抑制・過剰包装」

<論 点> 過剰包装、個包装をなくすには?

<参加者> 菓子メーカー、菓子卸売り、販売事業者、市民(6名)

課題別ステークホルダー総括会議 (H21. 1. 31)

<内 容> 「ペットボトルの半減」、「プラスチック製容器包装の半減」について
市民・事業者・行政が「自己評価」および「他己評価」を行う。

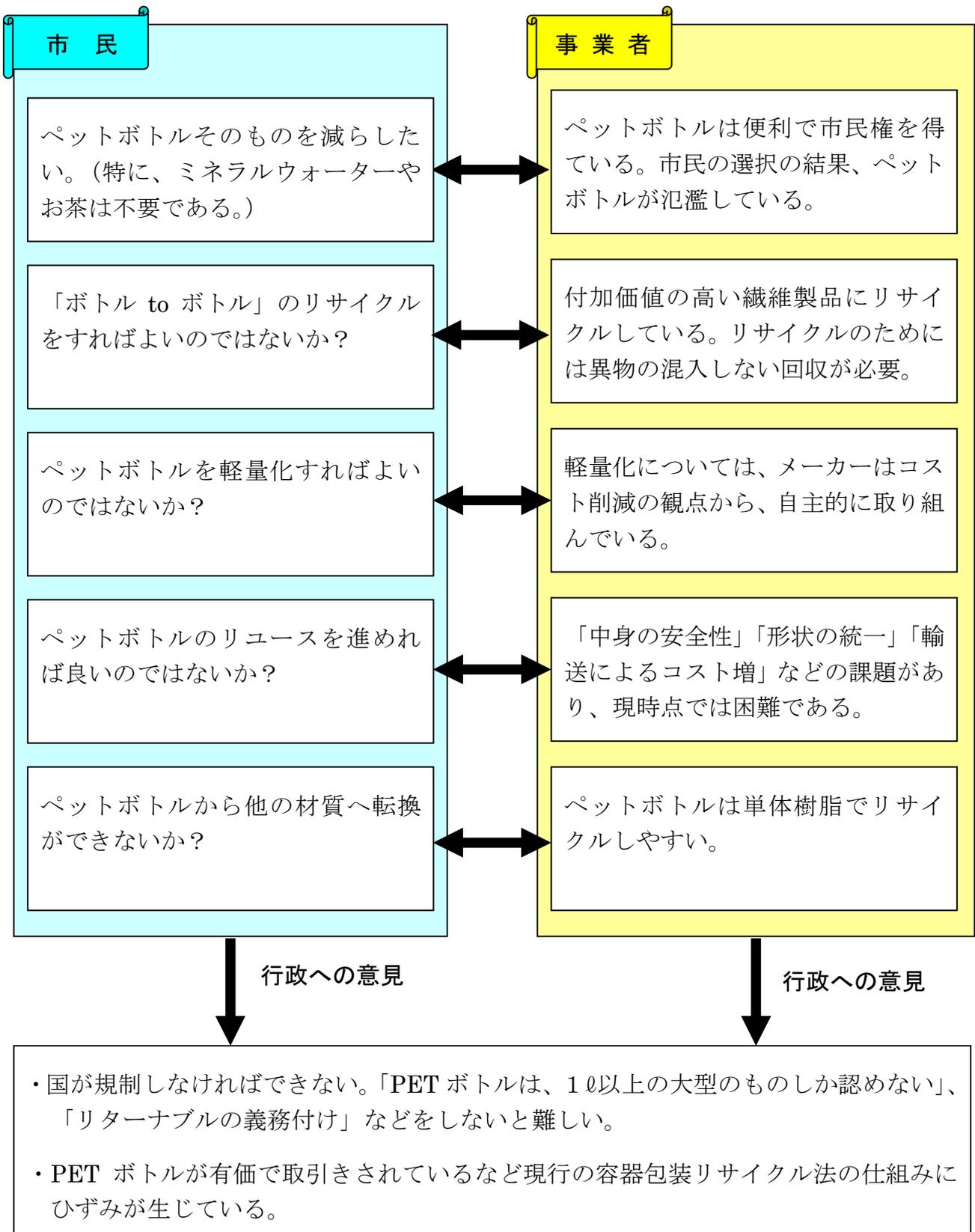
<参加者> 飲料メーカー、リサイクル業者、菓子メーカー、販売事業者
市民(10名)行政(名古屋市環境局)

ペットボトル

プラスチック
製容器包装

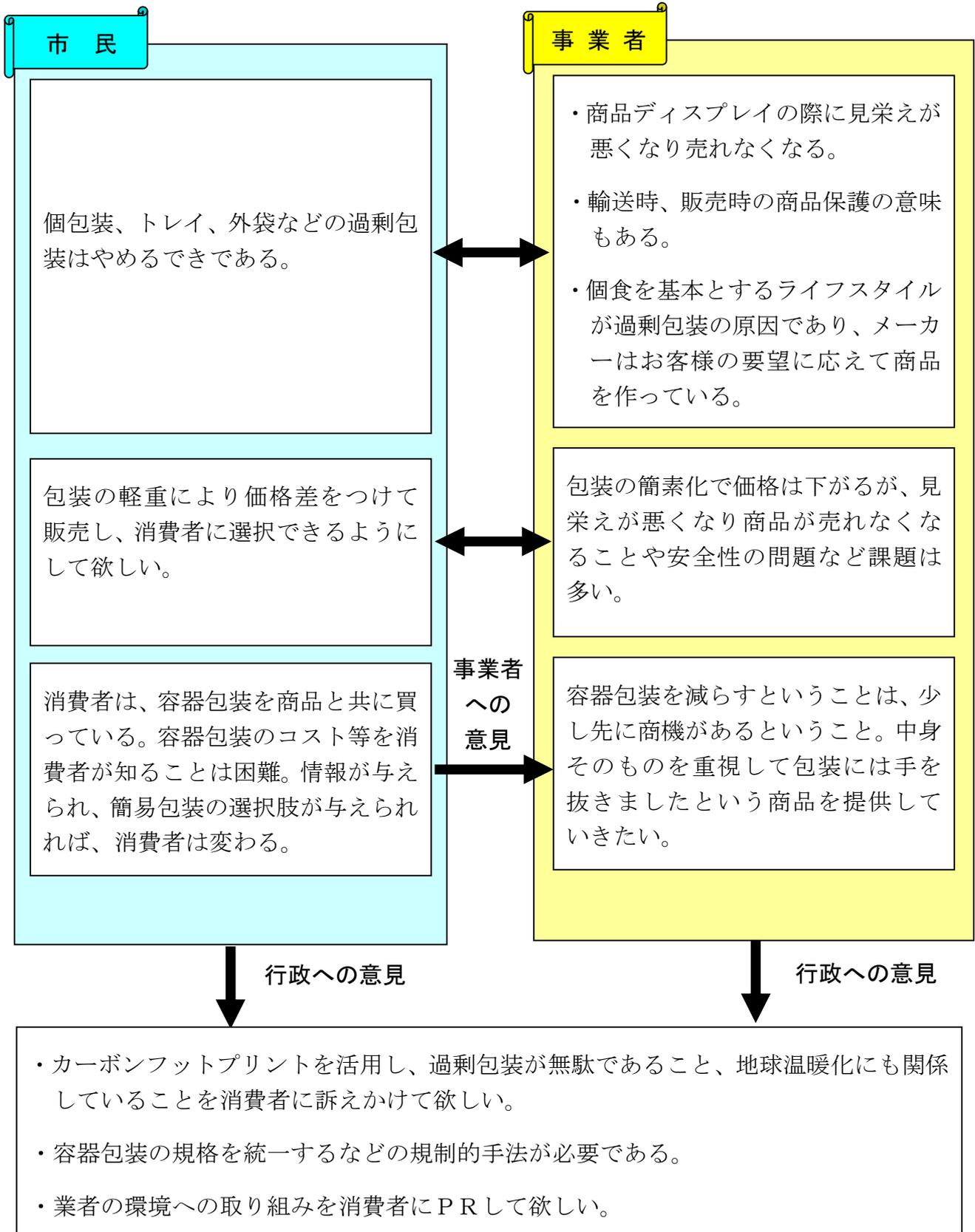
議論での対立点まとめ ～ ペットボトル ～

第1回～第3回まで、「ペットボトルを半減させるには・・・」というテーマで、「リデュース・リユース・リサイクル」という視点から、市民と事業者による議論が行われた。その議論の中で出た主な意見の対立点及び行政への意見を取りまとめた。



議論での対立点まとめ ～ プラスチック製容器包装 ～

第6回「プラスチック製容器包装」というテーマで、「過剰包装・個包装」という論点で、市民と事業者による議論が行われた。その議論の中で出た主な意見の対立点及び行政への意見を取りまとめた。



議論のまとめ ～ ペットボトル ～

現状

ペットボトルの流通量（全国）

ミネラルウォーター・お茶の発売により、小型ペットボトルの流通量が爆発的に増加（ミネラルウォーター・お茶で全生産量の半分）
（平成8年度⇒19年度 PET樹脂総生産量が3.5倍）

ペットボトルのリサイクルの現状（名古屋市）

区分	平成12年度	平成20年度
リサイクル量	3,000トﾝ (4kg)	7,000トﾝ (7kg)
分別率	88%	89%
コスト	5.3億円 (0.6千円)	10.7億円 (1.1千円)

※（ ）内は1世帯あたりの数値

※ 近年、ペットボトル無価物から有価物へ変化し、容器包装リサイクルの仕組みが崩れ始めている。（一国経済システムの限界）

(1) 消費者の行動

- ペットボトルは利便性が良く、広く市民権を得ている。
- 水道水の数千倍の値段のミネラルウォーターを好んで購入している。
- ペットボトルのリユースを進めるべきではないか？

(2) 事業者の行動

- 消費者のニーズに合わせてペットボトル飲料を販売している。
- リユースはコスト・安全面で幻想。取り組む気はない。
- コスト削減という観点で、軽量化の取り組みを精力的に進めている。（08/01年比で500mlでは50%以下の軽量化を達成）

(3) 行政の対応

- 国は、容器包装リサイクル法の改正をしているが、消費者・事業者・市町村のいずれも満足していない。
 - ・回収・選別に多額の税金が投入を強いられている。
 - ・有償入札により、容器包装リサイクル協会から市町村に対し拠出金が払われているが、市町村が負担している収集・選別経費とは大きく乖離しており、拡大生産者責任が不徹底。
- 国が「ペットボトルのリユースに関する研究会」を開催し、実証実験を展開するもリユースには不利な結果が出つつある。

結論

- ・ペットボトルのリユースは、現時点では困難（安全性確保が困難、形状の統一が必要、製造者への輸送によるコスト・環境負荷の増加を招く恐れなど）
- ・消費者の意識・ライフスタイルの変革（ペットボトルのミネラルウォーターやお茶は極力買わないなど）が必要
- ・国による法整備（拡大生産者責任の徹底など）が必要
- ・事業者と消費者の情報の共有化と協議の場を作ることが望ましい。

今後の取組み

(1) 消費者

「容器包装を半減させる消費行動を取ること」

- マイボトル運動（ペットボトルは買わない）
- 「名古屋の水は安全でおいしい」のPR運動
- 「せめてお茶は自分でいれよう」の啓発運動

(2) 事業者

「事業活動を通して、容器包装を半減させる消費活動を誘導すること」

- 軽量化のための取り組みをさらに推進
- 消費者への情報提供（容器代とリサイクルコストの製品への表示）

啓発・支援

協働

情報共有の場づくり
協議の場づくり

法規制等

(3) 行政

「元から減らす」法整備の国への働きかけ

- 拡大生産者責任の徹底。全てのリサイクルコストを事業者負担とし、商品価格に反映（受益者負担に）
- 小型ペットボトルの生産と販売への法規制（300ml以下は課税強化など）
- ガラス製リターナブルびん使用の義務付け、リターナブルとして認められる回収率の引き下げ（現行90%を50%へ）
- デポジット制度等の全国ルール化

「協働」の促進、地域での取組みが可能な市町村独自の削減策の推進

- 消費者と流通事業者が協働した容器包装削減の取組みの推進を先導

議論のまとめ ～ プラスチック製容器包装 ～

現状

プラスチック製容器包装のリサイクルの現状（名古屋市）

区分	平成 12 年度	平成 20 年度
リサイクル量	11,000 トン (12 kg)	29,000 トン (29 kg)
分別率	43%	65%
コスト	16.6 億円 (1.9 千円)	20.1 億円 (2.0 千円)

※（ ）内は 1 世帯あたりの数値

(1) 消費者の行動

- 個食を中心とするライフスタイルの増加により容器包装が氾濫
- スーパー・コンビニ等の販売スタイルを受け入れた消費をしている。
- 消費者は、容器包装を商品と共に買っている。容器包装のコスト等を消費者が知ることは困難。情報が与えられ、簡易包装の選択肢が与えられれば、消費者の行動は変わる。

(2) 事業者の行動

- 「消費者ニーズ」「商品の見栄え」「輸送時の商品保護」等の観点から、必要な容器包装を使用。
⇒ 消費者の視点からは「過剰包装」

(3) 行政の対応

- 国は、容器包装リサイクル法の改正をしているが、消費者・事業者・市町村のいずれも満足していない。
 - ・回収・選別に多額の税金が投入
 - ・素材が同じであっても、事業所から排出された容器包装は対象外（容器包装の製造・利用メーカーに責任が及ばない）
 - ・素材がバラバラで、「売った後のこと＝分別・リサイクルへの配慮」が十分でない。
- 市町村は国頼みに終始。地域の独自性を出そうとしない。

結論

- ・消費者のライフスタイルと消費行動の転換(過剰包装な商品を買わないなど)が必要。
- ・国による法規制(拡大生産者責任の徹底など)が必要。
- ・事業者と消費者の情報の共有化と協議の場が必要

今後の取組み

(1) 消費者

- 「容器包装を半減させる消費行動を取ることで」
- 「せめて鍋で調理、食器に移し換え」の啓発運動
 - 「容器包装もタダではない！ 値段の内」をPR
 - 「過剰包装な商品を買わない」運動
 - マイ容器持参運動

(2) 事業者

- 「事業活動を通して、容器包装を半減させる消費活動を誘導すること」
- 必要な容器包装は、「カサを減らす・簡素化」「素材の統一」を進める。
 - 消費者の選択を増やすとともに、容器包装の軽重を商品価格に反映
 - 消費者への情報提供(容器代とリサイクルコストの表示)

協働

情報共有の場づくり
協議の場づくり

啓発・支援

法規制等

(3) 行政

「元から減らす」法整備の国への働きかけ

- 拡大生産者責任の徹底。全てのリサイクルコストを事業者負担とし、商品価格に反映(受益者負担に)
- 大企業に偏っている事業者負担を是正
- 容器包装の規格統一を義務付け
- 不要と考えられる過剰包装の法規制

「協働」の促進、地域での取組みが可能な市町村独自の削減策の推進

- 消費者と流通事業者が協働した容器包装削減の取組みの推進を先導

第1回課題別ステークホルダー会議(要点)

テーマ:「ペットボトルのリサイクルと発生抑制」

- …… 市民
● …… 事業者

(1) ペットボトルそのものを減らすには？

- 缶からペットボトルへ移行したのは、輸送時の扱いやすさ・コストの軽減などが要因である。
- ペットボトルは便利で市民権を得ている。現状は、市民の選択の結果。
- ボトルはボトルに戻すのをまず基本にしたほうが、将来的にもいいのでは？（水平リサイクル）
- 現在は、ほとんどが繊維に再生されている。付加価値の高い自動車の内装（特に天井材）に多く利用されている。
- 異物が混入すると、ボトルへのリサイクルが困難になる。
- ペットボトルは便利で市民権を得ている。現状は、市民の選択の結果。

(2) ペットボトルの軽量化

- これ以上の軽量化は難しいのか？
- 業界でも目標を定め努力している（10年前に比べて劇的に軽量化）
- 薄くなりすぎると、輸送・梱包・販売時に商品を損なう可能性があり、これ以上薄くすることはできない。
- シュリンクフィルムは、更に削減できる余地があるのではないか？
- フィルムは中身の成分等の表示義務があり、難しい。また、中身を保護（酸化防止）する意味合いもある。

(3) 他の素材への転換

- ペット樹脂単体でリサイクルしやすいので他の材質転換はあまり意味がないのか？
- リサイクルのしやすさという観点で、容器の素材を業界で統一することはできないのか？
- 容器の素材統一について、メリットがあるのは、リユースの場合のみである。
- アルミボトルへの転換は？
- ペットボトルとアルミ缶の違いは、中身が見えるか否かである。アルミ缶は再利用率が低い。ワンウェイでリサイクル。

第2回課題別ステークホルダー会議(要点)

テーマ:「ペットボトルのリユース」

- …… 市民
● …… 事業者

(1) ペットボトルのリユース

① 安全性

- ペットボトルは化学物質を吸着・再溶出する危険性がある。誤用の問題。
- 稀に起こることに対しメーカーは過剰防衛的。
- PL法が問題。飲料メーカーとして出荷した全製品について、また詰め替えについても責任が持てない。
- クローズドシステム（宅配など）であれば、安全性が確保され、リユースシステムが作れる可能性がある。

② 回収システム

- ビールびんさえもデポジットによる回収ルートが崩壊している。
- リユースする場合は1品目1種類が原則。飲料メーカー1社が最大で1千種類程度のボトルを出している。膨大な回収・保管場所が必要になる。

③ リユースの優位性、普及の可能性

- 環境負荷とコストについて公平な比較と議論が必要（ライフサイクルをどこまで考えるかなどの前提条件により異なり、オーソライズされたデータなし。）（←リユースがリサイクルより環境負荷が高いというLCA調査の結果あり。）
- ペットボトルを丈夫なものにしていくと、LCA的にもコスト的にもリユースの優位性がなくなる恐れがある。
- メカニカルリサイクルの1つ「スーパークリーン」ならば、吸着物を全て吸いだせる。
- まずは「業務用」「20リットルの大きなもの」などのように対象を絞って取り組めば可能。宅配などのクローズドシステムなら可能。
- マイボトルなど、消費者自らが管理するならリユースの可能性はある。

④ 消費者の受容性

- 傷のついたペットボトルを实际見た参加市民の感想は、「買いたくない」。
- リユースびんは受け入れやすい。まずはびんから取り組むべき。
- 軽くて便利、少しでも楽をしたいという人間の心理をどう乗り越えるかが問題

(2) ボトル to ボトルのリサイクル

- 中国が全世界から廃ペットボトルを集めている。ほとんどが繊維にリサイクル。繊維やシートへのリサイクルは、ほとんどエネルギーを要しない。
- 日本に2箇所あったボトル to ボトルの工場は、原料高で採算が合わず、一つは倒産し、一つはほとんど稼働していない状況。
- 高いデポジット（1本50円くらい）による、ボトル to ボトルリサイクルのシステムづくり

第3回課題別ステークホルダー会議(要点)

テーマ:「ペットボトル以外のペット樹脂のリサイクル」

○ …… 市民

● …… 事業者

(1) PET樹脂容器の流通量

- PET樹脂容器は、ペットボトルと同じくらい生産・流通
(ペットボトル 57万トﾝ ペット樹脂容器・包装材 50万トﾝ)

(2) PET樹脂容器のリサイクル ～現状と課題～

- PET樹脂容器はペットボトルと同じくらいの生産量がありながら、水平リサイクル(PET樹脂容器 to PET樹脂容器)がされていないのが現状
- PET樹脂はペットボトルと同じくらい流通しているので、資源循環の仕組みが作れるのではないか。
- コンビニでは、ペットボトルの店頭回収はしているが基本的には売り切り。リサイクルについて検討はしているが、ネックになるのは廃棄物処理法(収集・運搬の許可の問題、有価物か廃棄物かがネック)。スーパーでも同じ悩み。
- 札幌で廃食用油回収の仕組みづくりの成功例がある。廃食用油は有価であるため、札幌市は、収集・運搬許可を不要の取扱いとした。こうした市民・事業者・行政の合意で変えられ、システム化できる取組みもあるのではないか。

(3) 卵パックのリサイクル

- PET樹脂は劣化しにくいのでリサイクルしやすい。いくつかの生協で、塩化ビニル製だった卵パックをPET樹脂製に変え、回収・リサイクルしている。原材料費が上がった分(約5円)は、事業者と消費者が折半して負担。
- これ以上店頭回収の品目を増やすことは、スペースの確保上困難。
- 生分解性プラスチック製の卵パックも流通してきており、PET樹脂製卵パックとの分別が必要となると、その分別が店頭回収する店舗の負担となる。これ以上手間をかけるのは限界。
- 卵パックがペットボトルと同じようにリサイクルできるのであれば、分別回収に協力したい。

(4) 素材別リサイクル

- 市場原理で、コストの安いものが生き残り、容器の素材は自ずと統一されるのではないか。
- 見栄えなどの問題もあり、売り方・作り方で素材は変わってくる。
- 素材別に分別回収してリサイクルをすることは、非現実的ではないか。それよりもリデュース・リユースに力を注ぐことが重要

(5) 全体を振り返って

- コンビニは以前と比べ、環境問題への取組みに前向きになったと感じた。
- リサイクルの取組みには、時間とコミュニケーションが必要。行政だけでなく、事業者・市民サイドで自主的にやれる取組みも進めていきたい。

第5回課題別ステークホルダー会議(要点)

テーマ:「容器包装・バイオマスプラスチック」

- …… 市民
● …… 事業者

(1) バイオマスプラスチックについて

- バイオマスプラは100%バイオマス由来ということではない。今回利用しているのは、デンプンであるが、将来的には未利用バイオマスも利用していきたい。
- 容器全体を生分解性プラスチックにしないのは、コストの問題である。
- 生分解性プラスチックは、あくまでも特定の条件下で分解されるということである。
- デンプンを使用したプラスチックはあまり例がなく、とうもろこしが多い。
- コスト的な問題から、バイオマスプラスチックの普及は進んでいない。特に、フィルムについては生分解性プラスチックにするとコスト高となる。
- 究極的な容器は、食べられるものではないか?と考えている。
- 発熱量は発泡スチロールと比較して半分である。
- 外観は不燃ごみに見えるので、分別するのに混乱するのではないか?

(2) 環境貢献について

- 販売する商品は、商品製造と管理はすべて自社で行っているため、容器包装の企画・素材について、自社で決めることが可能であり、今後は、容器包装の絶対量を減らしていきたい。
- 床材の変更、フロンを使わないガスの実証試験、照明のLEDの採用、IH型の採用、配送管理システムの採用、飼料化・堆肥化による廃棄食品の循環システムの構築、レジ袋削減への取り組みなどにより環境貢献している。
- カップ持参での飲み物の提供は衛生面で問題がある。問題が起こった場合の責任の所在(製造者、販売者)が問題となる。はかり売りなどは管理面で自信が持てれば展開が可能である。
- レジ袋の削減については、断ったお客さんへのポイント還元も含めて検討していきたい。また、「レジ袋不要カード」を入れてもらうなどコミュニケーションの仕方についても今後の検討課題である。
- 消費者の方も買うもののコストがどうなっているのか?物がどのように作られているかを知る必要がある。
- 今後、サービスの拡大をしていくとともに、消費者の方々にも理解して頂き持続可能なライフスタイルを目指していくことが大切である。
- おでんを買う時に鍋を持っていくと割引があるとよい。

第6回課題別ステークホルダー会議(要点)

テーマ:「容器包装・バイオマスプラスチック」

- …… 市民
● …… 事業者

(1) 過剰と思われる包装にも意味がある。

- 商品ディスプレイの際の見栄えの問題
- 輸送時や販売時に商品を保護するため

(2) 企業が消費者の嗜好に応えた結果、現在の容器包装の氾濫を招いた。

- 個食を基本とするライフスタイルへ変化
個食を基本にした商品開発になっている。

(3) 過剰包装が排除される仕組みの構築（経済的インセンティブと意識啓発）

- 包装の軽重によって価格差を設けて販売すれば、消費者に受け入れられやすいのではないか。
⇒ ● 包装を簡素化すればコストは下がるが、見栄えが悪いといった理由で商品が売れるか、安全性の問題がクリアできるかなど課題は多い。
- 商品の品ぞろえを増やし、消費者が選択できる状況を作って欲しい。
(地元住民と大手スーパーは運命共同体。市民の嗜好に合わせたバリエーションのある品ぞろえをお願いしたい。)
- 率先して取り組んだ1メーカーが不利になることのないよう、容器包装使用の規格を統一するなど、規制的手法が必要
- メーカーの環境に対する取組みを前面に出して消費者に訴え、消費者側の意識を変えていく取組みも必要
- 今後は、カーボンフットプリントを活用し、過剰な容器包装が無駄であること、地球温暖化にも関係していることを消費者に訴えかけていくことが必要

自己評価・他己評価の結果 ～ ペットボトル ～

総括会議では、「ペットボトルを半減させるには・・・」というテーマで、市民・事業者・行政がそれぞれの立場から、意見だしを行った。その結果を要求主体（市民が、事業者が、行政が）と被要求主体（市民へ、事業者へ、行政へ）の9分割の表にまとめた。

	市民へ	事業者へ	行政へ
市民が	<ul style="list-style-type: none"> ①ペットボトルを買わないようにしよう！ ②ペットボトルをやむを得ず買うなら大きいものを！ ③ペットボトル飲料は減らして不便にする。 ④お茶や水のペット容器は持ち帰り再利用しましょう！ ⑤4R(3R+Rethink) 買う時にもう一度考えましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ①使用後に潰せるようなボトルにして欲しい。 ②どこでも購入できるようにしない！（自販機が多い） ③お茶や水のペットボトルは不要。醤油、ソース等は仕方ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ①他の自治体と協力して容り法の改正を急いで欲しい。 ②回収用の容器袋の合理化を！（材質を含めて） ③必要性の情報発信！ ④行政はペットボトルのリサイクルにこんなに手間と費用をかけていると市民に知らせて欲しい。
事業者が	<ul style="list-style-type: none"> ①ペットボトルは循環型の最適材料。 ②環境に良い消費者行動を！売れなければ減る。 ③ペットボトルが減らなくても、Recycle されれば、他の石油資源を減らせます。分別レベルの向上を！ 	<ul style="list-style-type: none"> ①消費者に選んでもらえるように表示をつける。（カーボンフットプリント） ②発生抑制の徹底を図るべし！ ③リサイクルコストの増加に耐えて、ボトル to ボトルを積極的に行いましょう！ 	
行政が	<ul style="list-style-type: none"> ①市民が求める限り事業者は作り続ける。→ライフスタイルの転換を！ ②リユースは難しい。→減らすためには使わないこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ①事業者は、容り法により、応分の負担しているが責任は不徹底。 ②軽量化にも努力して欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ①啓発だけでは社会経済システムは変わらない。 ②イベントにはペットボトルを出さない。

自己評価・他己評価の結果 ～ プラスチック製容器包装 ～

総括会議では、「プラスチック製容器包装を半減させるには・・・」というテーマで、市民・事業者・行政がそれぞれの立場から、意見だしを行った。その結果を要求主体（市民が、事業者が、行政が）と被要求主体（市民へ、事業者へ、行政へ）の9分割の表にまとめた。

	市民へ	事業者へ	行政へ
市民が	<ul style="list-style-type: none"> ①容器を持参しましょう！ ②過剰な品質、見栄えを要求しない。 ③トレイにのせたものは買わない。 ④個別包装でないものを買きましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ①包装の軽重で価格差をつけて欲しい。 ②簡易・ノー包装の選択が、どの商品でもできるようにして欲しい。 ④対面販売を増やして欲しい。 ⑤器を持っていても買えるようにする。 ⑥包装の厚さを極限まで薄くて丈夫にして欲しい。(技術開発) 	<ul style="list-style-type: none"> ①トレイ→トレイへの回収を積極的に広報して！ ②包装に税をかける。 ③包装を少なくするよう呼びかける。
事業者が	<ul style="list-style-type: none"> ①家庭では、食べ物は”器”を利用して食べましょう。 ②ごみへの関心を一部の人でなくもっともっと広げて欲しい。多数派に！ 	<ul style="list-style-type: none"> ①事業者(小売メーカー)から市民へ提案できる商品を推進していく。 ②過剰な包装“見せ方”は止めよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ①不要と考えられる過剰包装は規制する！
行政が	<ul style="list-style-type: none"> ①過剰包装をしてもらわないよう断る。 ②なごや環境大学の講座案内をPTA向けに広報バラの商品を購入する際は、包装を省いたものを！ ③過剰包装な商品を買わないようなライフスタイルに！ 	<ul style="list-style-type: none"> ①野菜たとえばキュウリなどをバラ売りすること。 ②設計段階からごみが発生しないような製品を！ 	<ul style="list-style-type: none"> ①クリーニングの袋、指定ごみ袋を容リプラとして引き取るようにすること。 ②過剰包装でない商品を買うことへインセンティブを与えるような施策を！

おわりに

平成20年5月の第1回準備会で、課題別ステークホルダー会議の大テーマ「家庭のプラスチックごみを半分に減らすには？」だけを掲げ、どんなプラスチックごみを減らしたいか？ターゲットを何にするのか？も市民の方々と議論しながら始まった参加型会議。

長年、名古屋のごみ問題を追いかけて、「政策決定の場に市民参加を！できれば企画段階からの市民参画を！」と提案してきた者として、今回の課題別ステークホルダー会議は、企画段階から終わりまで「市民参画」の方針で進めてきました。参加市民の方には「会議、会議で疲れる。どこまで付き合うのか？」と、少々うんざりされた方もあったかもしれません。会議を運営するチームメンバーと事務局メンバーも、僅か9ヶ月間に、準備会2回、会議に先立つ市民向け学習会と見学会の実施、全7回の会議のスタッフとして、また各回の準備・記録作業など、ふりかえれば本当に良くやったなというのが実感です。特に事務局メンバーは、各回の会議テーマに合ったステークホルダー候補の事業者への参加要請、開催案内、出欠確認、議事録&まとめの作成作業などがこの前後に入り、まさに「毎日が自転車操業」の状態だったと思います。お疲れ様でした。

布や紙、ガラスや金属といったものに比べ、プラスチックは化学合成品ですから、議論する際に多少の知識が必要になります。そのため、どうしても情報提供が必要になり、その質疑に時間をとられることも多く、肝心の議論が不完全燃焼で終わり「まるで学習会みたいだ」といった感想もきかれましたが、豊富な知識と情報を持つ事業者と対等に議論をするためには必要だったと今でも思っています。この点は、もっとターゲットを絞り込み、会議回数を増やすことで解決できるはずです。ペットボトルに関しては、「こんなに綺麗なボトルなら使い捨てずにリユースすべき」と考えていた市民が、情報提供により「誰がどんなものを入れ、どんな使い方をしたかわからないリユースボトルは買いたくない」と心が揺れ、しかし最後には「やむをえない場合以外は買わない。マイボトル持参」と消費行動の変革の答えを導き出し、一応、会議の成果が得られたのではないかと考えています。

また、市民と事業者の認識のズレも発見できました。市民からすると「過剰包装」でも、事業者からすれば「中身の商品保護に必要」「見栄えが悪い商品は売れない」など。「発生抑制」の考え方そのものも、市民は「使い捨ての容器包装自体を減らしたい」だが、事業者は「軽量化で原材料の使用量を減らすこと」と考えており、このギャップは大きい。

プラスチック製容器包装といっても、材質も含めその種類は数限りなく、今回のステークホルダー会議で議論できた物はほんの一部。会議に参加した市民も事業者も限られています。ですから、この会議の結果が全てではなく、この「とりまとめ」を元に更に議論を展開することが可能です。プラスチック製容器包装について議論する際の「テーマ」がたくさん詰まっています。どうか、大いに活用してください。

2010年3月
循環型社会推進チームメンバー
岩月宏子

2010年3月発行

「課題別ステークホルダ会議」報告書

～家庭のプラスチックごみを半分に減らすには？～
議論のとりまとめ

編集・制作・発行　なごや環境大学循環型社会推進チーム

この冊子は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。